

- 学生時代と図書館 (36) -

『地域に開かれたアメリカの図書館』

鎌田 修

私は77年から92年の15年間をアメリカで過ごした。最初は修士号のためピッツバーグ大学で、それから、博士号のためアリゾナ大学からマサチューセッツ大学へという経緯である。82年からは日本語教師としてすでに独立していて、子供も2人いたので大学の図書館だけではなく、町の図書館に子供を連れていくということもよくあった。まず、最初の地ピッツバーグではまだ70年代半ばというのに圖書の貸し出し、また、目録などもコンピュータ化されていたのには驚いた。実際、ピッツバーグ大学の司書学(Library Science)はアメリカでもトップクラスに位置するとかで、建物も新しく、今から思うと空港のロビーに入っていたような雰囲気があった。すべての図書が開架式であり、また、出入りも例の赤外線「検査」を経るもので、当時の日本の図書館とは雲泥の差を感じていた。

アメリカの図書館にはそれが大学であれ、小学校であれ、町のものであれ、司書の資格(修士以上)をもった専門家が必ずいると同時に、本好きの学生アルバイトやボランティアの人々もともに働いている。そして、行き届いたコンピュータ化と同時に、適当な本を紹介してほしいという相談にも気軽に乗ってくれる窓口もある。私の子供が幼少のころを過ごしたマサチューセッツ州のアムハーストというところには、有名な詩人のエミリー・ディッケンソンという名前を付けた町の図書館がある。小学校の宿題の多くは図書館での調査を課するのが普通で、私の子供の場合もご多分に漏れず、図書館利用を余儀なくさせられていたが、そこで働いている人たちはその頃から20年近くも経った今でも、私の子供のことを覚えている。

第2言語習得研究で名を馳せたStephen Krashenというアメリカ人学者は、日本の家にはアメリカの家の倍以上の本が並んでいて、日本はリーディ

ング習得に理想的な環境を持つと言っていた。しかし、それは一般に日本人が人の本を借りて読むのを嫌がる習慣があるからであって、



アメリカ人が本を読まないというのではない。アメリカ人は本を買うより図書館を利用することを子供の時からしつけられているように思える。子供はカーペットの上で寝ころぶなり、好きな格好で本に接するという実質的な読書指導がなされている。

また、このアムハーストで私が赴任していたアムハースト・カレッジ(かの昔、新島譲や内村鑑三が卒業した大学)の図書館は、ここも著名な詩人ロバート・フロストの名前が付いていて、大学関係者全員(教職員、学生、教職員の家族等々)に開かれていたことも印象的であった。つまり、カレッジ・コミュニティ全体のための図書館であるという意識で運営されているということである。また、回りには他に4つの大学があり、どこの大学の学生も自由に利用できるようになっている。このように図書館を公的に開かれたものとするアメリカ人の姿勢は随所に見られ、インターライブラリー・ローンという制度も面倒な手続きを全く必要としない、誰でも気楽に利用できるシステムとして活用されている。(ちなみに、京都の大学だけなのかもしれないが、私の経験では紹介状がなければ他大学の図書館を利用できないのだが、そのような閉鎖性はどこかで改善していただきたいものである。)

「学生時代と図書館」というテーマが私自身の個人的な経験に基づいた日米図書館(文化)の比較になってしまった。地域に開かれたアメリカの図書館について述べてきたものの、それだけに日本の図書館にはない厳しい一面もある。それは一日たりとも返却が遅れれば自動的に罰金が科されるということである。日本の図書館はその点寛大である。何でも一長一短がある証拠と言えよう。お互い、責任を持って図書館の利用には臨みたいという気持ちで筆をおく。

かまだ おさむ(教授・日本語学科)